OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	看護師の職業認識と学習態度の関連性及びその影響要因
Author(s)	國重, 絵美
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43939
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏名	國重絵美（くにしげえみ）
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学位記番号	第 17706 号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	**看護師の職業認識と学習態度の関連性及びその影響要因**
論文審査委員	（主査） 教授 小笠原知枝 （副査） 教授 阿曽 洋子　教授 三上 洋

論文内容の要旨

［目 的］

今日、看護師の継続教育には体系化が求められており、体系化することによって効果的な継続教育が可能になると考えられる。体系化を進めるためには継続教育における学習プロセスの要因を取り出し、その関連性を明らかにすることが重要である。

そこで、看護師の継続教育における学習プロセスについて、職業認識から学習態度へ、さらに実践能力の自己評価へという流れを、学習動機プロセスモデルとして仮定した。

本研究では、職業認識、学習態度、実践能力の関連、さらに各概念に影響する要因を明らかにすることを目的とする。

［方法と結果］

研究1：看護職の職業認識の測定尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

50項目からなる質問紙による調査を看護師239名を対象に行った（有効回答数209部）。項目分析ののち、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、5因子が得られ、25項目からなる職業認識測定尺度（5下位尺度）を構成した。下位尺度名を「教育」「思考・理解力」「人格」「役割理解」「社会的意義」とした。測定尺度の信頼性について、各尺度のCronbach α係数（0.738～0.843）と、再検査法（r＝0.887）により確認した。妥当性について、内容的妥当性は因子分析、基準関連妥当性は生きがい感スケール、構成概念妥当性は日本版看護専門職役割意識尺度および日本版6-D Scale（実践能力の自己評価測定尺度、以下、6-Dと表す）との相関などにより確認した。

研究2：看護師の学習態度の測定尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

32項目からなる質問紙による調査を看護師384名を対象に行った（有効回答数276部）。研究1と同様の方法により、18項目からなる学習態度尺度（3下位尺度）を作成した。下位尺度名は「学習技術の自己評価」「学習価値観・興味」「自主的学習姿勢」とした。測定尺度の信頼性は、各尺度のCronbach α係数（0.867～0.900）、再検査法（r＝0.900）により確認した。妥当性について、内容的妥当性は因子分析により確認し、基準関連妥当性は6-D、構成概念妥当性は認知欲求尺度及び達成動機測定尺度との相関により確認した。

研究３：学習動機プロセスモデルの検証、および本モデルへの影響要因との関連性

実践能力の測定尺度として6-Dを使用した。データは、研究２の調査実施時に同時に収集したものを用い分析した。

職業認識、学習態度と実践能力の関連について各尺度間の相関係数は、0.319～0.523であった（$p<0.01$）。３尺度間でパス解析を行った結果、職業認識から学習態度への標準偏回帰係数は0.520、学習態度から6-Dへは0.490であった（$p<0.01$）。職業認識から6-Dへは有意な直接効果が見られなかったが、学習態度を介しての間接効果は0.255で有意な効果が見られた。

次に、勤続年数、職位、院外教育の有無、さらに行動に伴う結果に付随する原因の求め方を表し学習意欲などと関連があるとされている原因帰属様式を影響要因としてとりあげた。原因帰属様式の測定尺度として、（成人用）Locus of Control尺度（以下、LOCと表す）を使用した。職業認識尺度、学習態度尺度、6-DにLOCを加えた４尺度間の相関係数は0.285～0.570（$p<0.05$）であった。そこで、４尺度間でパス解析を行った結果、職業認識から学習態度への標準偏回帰係数は、0.489、学習態度から6-Dへは0.360、LOCから職業認識へは0.285、LOCから学習態度へは0.284で有意な結果を得た（$p<0.05$）。職業認識とLOCから6-Dへは有意な直接効果が見られなかった。しかし、間接効果を見ると、LOCは職業認識と学習態度を介して6-Dへ0.152、職業認識は学習態度を介して6-Dへ0.176の有意な効果があった。

さらに、その他の影響要因に関しては、職業認識、学習態度、6-Dの３尺度において職位、院外教育の経験の有無別で平均値に有意な差が見られた（$p<0.05$）が、勤続年数では有意差がなかった。

［総括］

本研究では、まず、看護職の職業認識と看護師の学習態度を測定するために尺度を構成し、信頼性と妥当性を検討して、実用可能な測定尺度を開発した。

次に、開発した尺度をもとに、職業認識、学習態度、実践能力の関連性を検討した。各尺度間には有意な相関が見られ関連性が示唆された。パス解析を行った結果、職業認識から実践能力への直接的な影響は見られなかったが、学習態度を介して間接的には影響があることが示唆された。このことから、看護職に対する認識を高めるだけでは臨床能力の向上は望めず、学習に対する態度を強化することが重要であると考えられる。

職業認識、学習態度、実践能力への影響要因として、LOCにより測定した原因帰属様式は、職業認識と学習態度に直接的な影響を与えているが、実践能力に与える影響は少ないと考えられる。さらに、職位、院外教育の有無は関連があると考えられるが、勤続年数については各概念との関連は見られなかった。

論文審査の結果の要旨

臨牀場面のケアの質を向上させるために、看護師の継続教育を効果的に行うことが課題になっている。國重絵美氏の研究は、看護師の職業認識から学習態度へ、さらに実践能力の自己評価へという流れを学習動機プロセスモデルと仮定して、職業認識、学習態度、実践能力の関連性と、これらの概念に影響する諸要因を明らかにすることを目的に進めたものである。

研究を３つの段階に分け、研究１と２においては看護師の認識尺度と学習態度尺度を帰納的手法で作成し、その信頼性と妥当性を検証した。研究３では、これらの尺度をもとに学習動機プロセスモデルを検証し、さらにこのモデルへの影響要因への特定化を試みた。

その結果、職業認識から実践能力への直接効果はないが、学習態度を介して間接効果があることがパス解析により示唆された。また勤続年数、職位、院外教育の有無、原因帰属様式などの影響では、原因帰属様式は職業認識と学習態度に影響を与えているが、実践能力には影響が少ないこと、また職位、院外教育なとの有無は影響されるが、勤続年数については影響しないことが示唆された。

本論文は看護師の継続教育を効果的に行うための重要な知見を提供するものであり、保健学博士の学位授与に値すると考えられる。